
無題0001

篠崎麻琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無題0001

【Nコード】

N38830

【作者名】

篠崎麻琴

【あらすじ】

少年の視点からの、ある少女の崩壊。

（前書き）

この話を読む前に、1点注意がございます。

この話は、はっきり言うところグダグダです。何が言いたいのか、自分にもさっぱりわかりません。

これからこれを読む方は、その点ご留意ください。

彼女が泣いている。

そのむせぶような泣き声が、僕の耳に突き刺さる。

繰り返す嗚咽。止まない涙。

でも僕は、彼女に何も出来はしない。

- - - - -

彼女は、この四月にこの学校に転校してきた。

元気そうな栗色の長い髪が、お辞儀と共に何とも鮮やかに美しく空を舞った光景を、僕は未だに忘れていない。

ああ、あの頃はあんなにも美しかったのに。

この学校ではもはや日常的に行われていた暴力行為やいじめに、転校生の彼女は果敢に立ち向かった。

いじめているのが誰であろうと、いじめられているのが誰であろうと、彼女は決して差別せず、それに立ち向かったのだ。

僕から見ればそれは正当なものであったが、いじめを行っている側からしてみればそれは面白くなく、いつしか、いじめの対象は彼女へとシフトしていった。

結果。

夏休みが明ける頃には、一人を除いたこの学校の生徒全員が、いじめ被害を受けなくなった。

しかし、そこから除かれた一生徒とは、

果たして、彼女であった。

綺麗な栗色だった髪は日に日にその艶を無くし、無惨に引きちぎられたような跡も見られるようになった。

ノートが、教科書が、彼女の机から次々と無くなり、見つかるそれはゴミ箱の中だったり、落書きされていたりした。

噂によれば、放課後に体育館裏に呼び出され、集団リンチを受けた事もあったという。

結果、彼女はかつての姿を失い、ただ無惨ないじめられっ子になってしまった。

さて、ここで僕はある2つの告白をしなければならない。

1つは、僕が彼女の事を好きだったという事。

もう1つは、それにも関わらず、僕は彼女を救おうとしなかったという事である。

僕自身も、いじめは良くない事だと考えてはいた。

しかし、実際にいじめの現場に割って入り、場を収めるような事は出来なかった。いや、しなかった。

止めれば、いじめ集団に眼をつけられ、自分までいじめられてしまうのではないか、という恐怖からだった。

自分が好きであるはずの彼女が目の前で、例え殴られていようと、僕はその恐怖ゆえに何も出来なかった。

結局、僕は弱く、

彼女は強かった。

それだけなのだ。

そして彼女はその強さゆえに傷付き、僕はその弱さゆえにまた傷付く事になったのだ。

好きな人が目の前でいじめられているのにも関わらず、何も出来ない自分。

結局、彼女から目をそらしたただだったのだ。

いつしか日毎、彼女は下校中に涙を流すようになった。

それを偶然に見つけた僕は、それから毎日、彼女の後について下校するようになった。

何か、彼女のためにしてあげたくて。

学校の外でくらい、彼女を守ってあげたくて。

嗚咽しながら帰る彼女を、僕は見守る事しか出来なかった。

ある日、いつものように彼女の後ろをついて下校している時、彼女は突然に走り出した。

びつくりした僕が急いで追いかけると、彼女は近くの公園に飛び込んだ。

僕も、急いで公園に飛び込み、すると

「来ないでッ！」

彼女がこちらを見て、鋭い声をあげた。

手にはカッターナイフが握られている。その切っ先は、まっすぐ僕に。

「毎日毎日私をつけ回して、何をする気なのッ!? 自宅を特定して、押し掛けるつもり!？」

「い、や……そん、な……」

自分の声が震えている。

「じゃあ何よ!？」

彼女も震えていた。

「何よ!？」 毎日毎日毎日毎日殴られ蹴られ、教科書ノートに落書きされて、ただでクラスメイトは見てみぬふりばかり、そんな立場の人間の事なんか、考えた事も無いでしょう! 私はもうどうにかなりそうなの! 友達はおるか、いじめを止めてくれるような人も

いない、相談できる親も教師もない、そんな人間の事なんか、あな

たにわかりっこないでしょう!？」

それは、彼女の心からの叫びだった。

「もう一人にしてよ! どうせ誰も何もしてくれないんだから!

何もしないでそこにいる位なら、この場から消えて、お願い!」

想像して欲しい。自分の好きな人が、髪を振り乱し、半狂乱になつて叫んでいる様を。

それは、あまりにも残酷だ。

「もう嫌なの! にんげんの顔を見たくないの! あっち行つてよ、ねえ!」

彼女は地面に倒れ込み、それでもなお叫んでいる。

「あっち行け! にんげんなんか見たくもない! 見たくないんだよ!」

夕日が公園を真っ赤に染めている。

その赤い公園で、ただ泣き叫ぶ彼女。

しかし、僕に出来る事は何もない。

自分の無力さを、噛み締める以外には。

（後書き）

……と、まあ。

こんな感じでした。

先週の夜中に、2時間で打ち込んだ話です。後になってからの推敲もしていません。

なんとなく、感情に任せてキーを打った気がします。

まあなにぶん、書いた本人がよく覚えてないのでなんともいえません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3883o/>

無題0001

2010年10月18日20時45分発行